

財団だより

# 多摩川

1983. 9. 第19号



●カワセミ 美しいコバルトブルーの羽をもち、水辺の小枝にとまって小魚をとる



## ■ 多摩川博物誌 ■

日原川上流の石灰採掘 (天祖山)

### ③ 奥多摩の石灰

慶長十一年（一六〇六）から幕府は江戸城の大改修にとりかかった。いまでも石灰の産地としては青梅付近の成木や小曾木が有名であるが、その石灰が城郭の資材として幕府の目にとまったのである。

八王子に住んでいたときの代官、大久保石見守長安のもとへ老中から命令書がとどく。「今度、江戸城作事、御用白土、武州成木村、北小曾木村、山根、取寄候事」

関東地方でも石灰の産地は他にもあるが、江戸に近いということで下命を受けたのであろう。そして、そのために青梅街道が開かれる。石灰伝馬をもつことを条件として、田無と箱根ヶ崎の二十キロの無人の荒野が開拓され、つぎつぎと新田ができていく。この街道を運ばれた石灰が城の天守閣を輝かせ、大名や大商人の白壁用となり、いうならば江戸市街の美化に役立ったのである。

さて、石灰焼がまは幕府からの多額な拝借金で運用され、特需的性格が強かった。そのため幕府の財政が苦しくなると特需もダウンをするなど、石灰の生産はいくたの変遷をへてきた。

いま、日原の山奥で掘りだす石灰は月産三十万トン。全国でも一、二位をあらそう。大手は奥多摩工業で工場の炉も屋根も真っ白。国鉄はドル箱とあって懸命のサービスをつづけ、三十九年のオリンピックには二百五十二万トン運び、その後も高速道路ブームでうけに入っている

駅の貨物主任にきくと「はい、おかげさまで、うちは全国一の貨物発送駅。青梅線全収入の六割を稼ぎます」という。この石灰は立川経由で南武線で浜川崎へ。一日四十本の貨物列車を走らせる。行楽客などは列車の通過で駅で待たされるのは当然のこと。

しかし困り切っているのは地元民。汚染と騒音、工場近くの部落では公害対策委員会をつくり、集じん機の取付に成功したという。

このほか日の出町の勝峯山の石灰岩に目をつけた浅野セメントは、五日市鉄道株式会社に資金を援助して、大正十四年四月（一九二五）に拝島と武蔵岩井間を開通させ、さかんに石灰を輸送しているが、日の出町も奥多摩と同様にどこの屋根も白く汚れる。

ところが、この石灰岩の割れ目からしみこんだ雨水が岩を溶かし洞窟をつくる。鐘乳洞の上からたれているのが鐘乳石、下から円錐形にでているのが石筍である。

日原川には日原と倉沢鐘乳洞。秋川の支流の養沢川には養沢と大岳鐘乳洞。さらに雲取山のふもとには青岩と小袖があり、未発見のものも多数ある。なかでも日原が有名。見学料を払い谷川に降りて奇岩をたどる。深く進んでいくと長さ二・五メートルの石筍『金剛杖』、最大のもは『白衣観音』、そして無数にあるのが『村雨が原』と、数万年にわたる自然の造形の妙は見る人をあきさせない。

(三多摩物語・宮沢光顕著・有峰書店・1975年)

## 多摩川散歩

### ●野川下流・三鷹市大沢付近

三多摩問題調査研究会会員 松岡 恒司

昔、ICUのゴルフ場だった野川公園を川の流れてそって下ると広い道路との立体交差に出会う。そこは、野川の堤の道がその下をくぐり抜ける通路になっている。

ほの暗くなんだか湿っぽいそのトンネルをすぎるとそこが大沢である。国分寺崖線のこんもりとした緑とゆるやかな野川の流れがバランスよく配置され、ワラぶき屋根の民家も見えかくれする。そこはいまも水田が残されてもいて、なつかしい“ふるさと”景観の世界である。

左岸側の崖線(ハケ)にはいくつか湧泉がある。なかでも箕輪一二三さん宅のワサビ田の湧水は水の量も多く、ことのほか清冽である。近藤勇の墓のある龍源寺への道を越えたところにそのお宅がある。ワラぶきの旧家と盆栽用の見事なサツキの間を抜けると湧水をためた池があり(最近水量が減って半分の大きさになってしまった)池の左側がワサビ田になっている。ハケの下部に大谷石で石垣をつくり、その石組みの間から湧き出る水を礫を敷きつめた傾斜のあるワサビ田に引くのである。そこに立って足もとを見つめると、礫のあいだをひたすように、あるいは細流をつくりながら流れる湧水に感動してしまう。私たち三多摩問題調査研究会は10年ほど前からハケの湧水調査を国分寺から調布まで実施してきたが、調査日の昼食を食べるのはなんといっても流域ではここが一番

だと私は思う。

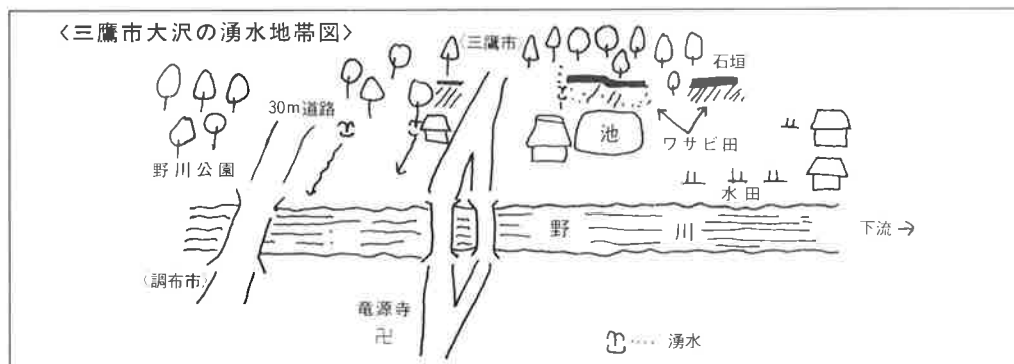
ワサビ田へ何か別の植物を植えてもすぐ大きくなって青々としてしまうんですよ、と箕輪さんの奥さん。生きものをはぐくみ育てる豊かな空間がそこには構成されているのかも知れない。いままで春と秋の年2回の調査だが、なんどもサワガニを見た。今年の5月初めにうかがったときは私のすわった場所から3mぐらいのところをカワセミがひすい色の背をみせながら飛んでいった。

池の右手へいくと畑があり、その先には水田がある。4・5年前だったかワラぶきの旧家にとめていただき稲かりの手だすけと称して実はジャマばかりし、役にもなんにも立たなかったことが思い出されもする。都心で生れ育った私はレンゲ(ゲンゲ)の赤い花をはじめてその水田で見たのだった。湧水を集める水路がオタマジャクシでにぎわうころ、タモ網をもった子供たちが遊び、時間をわすれている姿はいまも見られるだろう。

ここを越えて野川沿いに下流に進むと宅造地の間に湧泉が2ヶ所あり、その先の東大馬術部の馬場の隣には長谷川病院があって、近年新築の際に湧水を貯める水槽をつくり、生活用水に効率よく利用しているときく。

下流に向かって歩いてても、調布市に入るまでそこからしばらくは湧泉はない。

大沢は都市で生活する人に是非一度たずねてほしい所である。





小金井市緑町南陣屋橋付近の仙川 1983. 7. 16 (写真1)



小金井本町住宅内の仙川 1983. 7. 15 (写真2)

東京農業大学総合研究所教授 門 司 正 三

多摩川と私との遠くて近い縁ができたのは、昭和44年1月、都心から小金井市緑町の仙川ぶちに移り住んでからである。岸には雑木や雑草が生え、水は濁っていたが、川らしい姿をみせていた。しかし、梅雨の長雨、台風の豪雨に、川の水はあふれ、路傍に土のうを積み、玄関の履物を廊下にも上げることも再三であった。

そのうちに、洪水を防ぐための仙川の水を野川に落す地下工事が、付近の井戸水の汚染の問題で反対も多く難行したが、やがて完了した。また仙川の改修工事も進み、自然的な土手はコンクリートと鉄板の河岸に変えられた。さらに数年前、小金井市の下水工事が完成し、家庭排水はもちろん、すべての雨水までもすいこまれ、三鷹市東南端の下水処理場に流されることになった。これらの土木工事の結果、本町から緑町にかけての仙川は、多少水は澄んだが、流れを失ってしまった。大雨の後も、ほとんど増水することなく、川底に、セリ、タイヌビエ、ケイヌビエ、スイバ、イヌタデ、ミゾソバ、ポントクタデ、さらにオオケタデなどが繁茂している(写真1)。枯草や腐植などの堆積で、川の陸地化は急速に進むであろう。

仙川は、小金井市貫井北町の公務員住宅付近の地下に発し、本町団地の間をサクラの樹林にかこまれ芝生の中を流れて景観を作り(写真2)、やがて緑町団地を経て、緑小、緑中、電機大グラウンドの脇を通り、武蔵野市の桜堤団地、亜細亜大、国鉄むさし境駅の近くの獣医畜産大、三鷹市に入

って上連雀の都営住宅などと地下や地上を東や南に流れ、杏林大、新川団地、京王団地、塵芥焼却場、東部下水処理場のあたりは多少幅広く、調布市の白百合女子大、仙川団地の南を流れ、京王線仙川駅の北東を通り、世田谷区に入り、駒大グラウンドから成城大、砧東宝撮影所、大蔵団地、区立総合運動場などのそばを流れて鎌田に行き、そこで、遠く国分寺に発し小金井、三鷹、狛江を流れてきた野川と合して、二子橋下で多摩川本流に合流する。小田急成城学園前駅付近では、川幅10m、水も勢いよく流れ、堰のところでは洗剤の白い泡が浮かんでいた。

「小金井風土記」の芳須緑氏によれば、仙川は昔は悪水と呼ばれ、雨が降るとすぐ洪水になり、周辺の農民を悩ました。本町住宅あたりは昭和の初めまでは見渡すかぎりの低地性の雑林で、長雨のときは2m以上浸水し、農作物は大被害を受けた。本町住宅は3mぐらい盛土してある。雨がないと雑草が茂り、刈り取らねばならず、降っても照っても農家にとってはやっかいな川であった、とある。野川は良い川、仙川は悪い川とでもいえよう。

このじゃまにされた仙川は、現在では周辺に多数の団地や大学などの敷地を残して、都市に圧迫された小河川の運命を象徴して流れている。天の恵みの水は、河川、貯水池、あるいは地下水として、できるだけ土地に長く留めて利用すべきであろう。川は流れる水があつてはじめて成り立つ。川のある風景がいかに人々に豊かなものを与えるか、小さな自然の保全も考えられるべきである。



昭和49年頃の丸子橋下



昭和58年 夏の丸子橋下

### ●天然アユのソ上

上の2枚の写真は、昭和49年と58年8月の丸子橋下の写真である。昭和40年後半といえば、この丸子橋下から河口までの、いわゆる多摩川感潮域の水質は極めて悪く、写真の様に洗剤のアワに被われ、とても魚など棲めそうな様子ではなかった。ところが、このところ、アワもめっきり少なくなり、水質がかなり改善されている様子がわかる。

今年の3月から5月にかけて、東京都水産試験場が調査した結果、この丸子橋下に、相当量の海産稚アユが東京湾からソ上している事がわかった。海産稚アユというのは、前年、多摩川本川で放流された、主に琵琶湖産のアユが、多摩川で産卵し、フ化したものが、川を下り、一冬を東京湾で過ごす。それがやがて、東京湾の水温と多摩川の水温が同じになる春先に多摩川へソ上するアユの事である。調査は、56年度から始められたが、今年になって、定置網による調査では、3月中旬にソ上が始まり、4月6日には、1日に1080尾もの、体長8cm程度のアユが捕獲されている。3月から5月までの約90日間で13000尾程が調査網にかかっている。天然アユのソ上については、地元漁協や釣人の間で、4～5年前からウワサされていたのも事実だが、本格的な調査によって今回初めて明らかにされた。網にかかったアユの数が喜ぶに値する量であるかどうかは判断しかねるが、一時期の多摩川からすると信じられないような話でもある。

多摩川最下流部の水質は、この2～3年急速に

改善されている。その理由は、水質規制や下水道の整備などいくつかの理由が挙げられよう。この水質の改善が、天然アユのソ上につながったとすれば、明るいニュースである。多摩川の漁協では、毎年200万尾ぐらいのアユを放流している。むろん、これは、釣り用の放流である。しかし、そのほとんどが、6月のアユ漁解禁から秋までの間に釣られてしまうそうだ。そして、かろうじて残ったものが、多摩川中流部の河床に産卵するらしい。水産試験場では、この産卵場所の調査を今後行なう予定になっている。アユの産卵条件は、河床が砂混りレキの所が理想で、卵は深さ30cm程の砂の中でフ化する。ところが、河川工事などで川底が荒らされたりする事が多く、なかなか好条件の場所が得られないのが実状である。又、水質汚濁による浮遊物が沈下し、砂地に堆積すると目づまりの為、卵が死滅する事も多いという。

幸いにしてフ化し、東京湾に下っていった仔アユが、再びソ上を始めているのなら、多摩川でそれを受け入れる準備を始めなくてはならない。多摩川中流部の水質は下流とは逆にあまりいい状態とは言えない。それでもなおかつ、多摩川産のアユが世代を交代していく可能性があるとするれば、少しずつその条件を整えていくべきだろう。カワセミが戻った、アユが戻ったという事実は、多摩川が少しずつその環境を回復しつつあるきざしかも知れない。カムバックサーモン程のハデさはないが、目立たない所で、こうした本来の姿が甦りつつある事に、何か力強いものを感じる。

## 財団の事業紹介

### 〈研究助成1〉

昭和58年度（第1次選考）研究助成課題が、このほど決定しました。今回決定した研究はA類継続研究18件，A類新規研究6件，B類継続研究5件，B類新規研究6件，合計35件です。新規研究課題は次のとおりです。



現在までに発行された助成集報・助成集

研 究 課 題	代表研究者	所 属
〈A類研究〉		
●多摩川における水塊の挙動を支配する水理条件とその評価	廣 沢 佑 晴	東京大学工学部助手
●多摩川底泥構成物質の毒性学的研究	大 石 真 之	都立衛生研究所毒性部所員
●野川流域の水循環機構に関する試験流域による研究	高 橋 裕	東京大学工学部教授
●多摩川水系浅川流域における気温の水平ならびに垂直分布と大気環境との関連に関する研究	佐 藤 典 人	法政大学文学部助教授
●府中崖線地域における水系および土壌の重金属分布に関する研究	岡 崎 正 規	東京農工大学農学部助手
●河川沿川の都市的土地利用の特性把握に関する研究	中 島 将 勝	㈱環境創造社代表取締役
〈B類研究〉		
●多摩川の底生動物の生態をもとにした環境教育プログラムの作成	橋 上 一 彦	学芸大学付属小金井中学校教諭
●多摩川下流における運搬と堆積について—おもに二子橋付近における水の濁りについて—	青 柳 隆 二	川崎市立宮崎中学校教諭
●多摩川の水質と環境教育	斉 藤 雅 茂	法政大学第二高等学校教諭
●野川流域の環境浄化を進め、野川を身近なものにするため流域住民等の意識及び自然環境の調査並びに啓蒙に必要なテキストの作成	吉 田 喜 八 郎	井戸端議会小金井代表
●多摩川の洗剤汚染調査	笹 川 忠 夫	川崎市立柿生中学校教諭
●等々力溪谷（八沢川）の武蔵野台地露頭の地層中に含まれる化石珪藻の研究	小 出 悟 郎	神奈川県内広域水道企業団水質試験所長

### 〈研究助成2〉

助成集報（第7巻）及び多摩川環境調査助成集（第3巻）が完成しました。内容は下記の通りです。

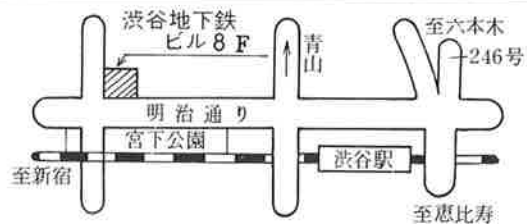
#### 助成集報（第7巻）

研 究 課 題	代表研究者	所 属
●多摩川水系の大型底生無脊椎動物相—1959～81年間の採集記録ならびに主要種の採集地点図—	松 本 浩 一	新日本気象海洋(株)生態室長
●多摩丘陵における水循環機構と都市化によるその変化に関する研究—地域水環境計画の基礎として—	虫 明 功 臣	東京大学生産技術研究所助教授
●不飽和浸透流の汚水処理機構とその応用に関する研究—多摩川流域に設けた「毛管浸潤トレンチ」を研究対象として—	八 幡 敏 雄	明治大学農学部教授
●多摩川中流域における自然環境の変容—中小河川・用水網の廃止・改変にともなう土地利用形態の変化—	沢 田 清	日本大学文理学部教授

#### 多摩川環境調査助成集（第4巻）

研 究 課 題	代表研究者	所 属
●多摩川における簡易水質調査法の研究—アンモニウムイオンの検出及び定量法—	長 田 真 一	都立東村山高等学校教諭
●浅川支流（湯殿川・兵衛川）における底生生物と水質の調査	露 木 達 夫	都立上野高等学校教諭
●地域（多摩川中流域）の自然を教材化に生かした理科教育—4年「流れる水のはたらき」の実践を通して—	花 岡 紀 子	府中市立本宿小学校教諭
●多摩川中・下流域及び多摩水道橋付近の水質調査、ならびに狛江高校を測定点とした大気汚染の調査	浅 川 昭	都立狛江高等学校教諭
●奥多摩湖を中心とした多摩川上流における淡水魚類の生態について	野 口 光 世	奥多摩町立小河内中学校教諭
●多摩川沿いの多摩丘陵東縁部の地下水の性質—1.川崎市立宮崎中学校科学部の活動, 2.硫酸イオンの動向と水温を決定する要因について—	青 柳 隆 二	川崎市立宮崎中学校教諭

- 発行日 昭和58年9月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (0488)31-8125